

「自分たちにできること」

遺族対応 男性警察官

3月11日、巨大な津波に家具や車、家までもが飲まれる映像を目の当たりにし、これまで自分が経験したこともない大規模な災害出動になる、そう思いすぐに部隊全員で出動の準備にかかったが、私は一瞬、この惨状を目の前にして自分は一体何が出来るのだろうかという不安に駆られた。それでも、何とかしてここにいる人たちを助けなければならないという思いだけは揺るがなかった。おそらく私だけではなく、部隊の誰もがそう思っていただろう。

その日の夕方、本県の広域緊急援助隊が真っ先に現地へ向かったという知らせを聞いた。災害発生からたった数十分という、そのあまりの早さに頼もしさ、崇高なものを感じた。派遣された部隊には自分もよく知る同期がいる。「頑張っ欲しい」という期待と同時に、「先を越された」という悔しさのような感情も込み上げた。「次は自分たちの番だ、あれこれ考えていても仕方ない、その時出来るだけのことをしよう」と私は自分の心に誓った。

3月19日、私達の部隊は被災地へ向かった。活動場所は宮城県石巻市の遺体安置所である。そこで私達に与えられた任務は、ご遺族の方にご遺体をお返しすること、運ばれてきたご遺体を安置することだった。年老いた親を亡くした夫婦、妻子を亡くした夫、我が子を失った親など毎日何百人というご遺族の方々がそこを訪れた。私達は、行方不明の家族や知り合いを探しに来られた方を身元不明遺体が安置されている場所まで案内したり、家族のご遺体を引き取りに来られた方に書類を渡し、手続きについて説明した。どんな内容であれ被災者の役に立てることなら進んで事にあたろうと臨んだが、ご遺族の方をご遺体に会わせる仕事はあまりにも気が重く、初めのうちは何を話せばいいが分からず戸惑った。親しい人を突如失ったご遺族の方に向けられる言葉など見つかるはずがなく、私は、幸せな家族を持つ自分が申し訳ないような気持ちになっていた。

私達は活動現場から少し離れた場所にある体育館で寝泊りさせてもらった。食事は持ってきた非常食を食べ、夜は冬の厳しい寒さが残る中、毛布を敷き寝袋にくるまって眠った。衣食住どれも厳しい環境下ではあったが、辛いなどという感情は、おこがましくて持てなかった。私達の置かれていた境遇は、被災者の方々に比べあまりにも恵まれ過ぎていると思ったからだ。

変わり果てた家族と対面し、泣き崩れるご遺族の横で、私は涙を流すのを必死で堪えた。私は、警察官なのだからここで泣いてはいけない、そんな立場ではないと自分に言い聞かせ、涙が込み上げてくるのを上を向いて必死に堪えた。

私達がそうした作業をしている間にも、捜索部隊が毛布に包まれたご遺体を次々と安置所へ運んで来た。彼らは運んで来たご遺体を降ろしては現場へ捜索に出かけ、新たなご遺体を発見し、それを運んで来てはまた捜索へ出かけていった。そのため、初めは数百体あったご

遺体の数は日が経つにつれ増えていき、やがて千体を越えた。自衛隊の他、他府県の機動隊や消防隊、海外の応援部隊も捜索活動にあたっていた。皆、それぞれ所属は違うけれど同じ目的をもって東北に集まってきたのだ。そう思うと不思議と親近感が生まれ、自分達も負けていけない、一緒に頑張らなければという気持ちが沸いてきた。彼らが見つけてきてくれたご遺体を無事にご遺族のもとへお返しすること、それが今の自分に出来る唯一にして全ての職務だと思った。それは絶対に疎かに出来ない職務だった。

やがて現地での活動期間が終わり、まだまだやるべき仕事を残したまま私達は帰県することになった。私達が帰ってしまった大丈夫なのかと思ったが、道中で、様々な部隊や自治体の車両と何度もすれ違っていったことを思い出し、志を同じくする者が日本中にいることを心強く思いながら現地を後にした。

この出動において、私達が被災地で残してきた行動、言葉そのどれであれ、少しでも被災地の方々の役に立つことがあったのならば、私はそれを誇りに思いたい。



石巻市内で捜索する隊員



派遣部隊を応援する地元の皆さん